



勝平得之『版画集 橡ノ木の話』より

生誕100周年記念企画展

富木友治

とちのき

橡ノ木の話展

平成28年8月6日^土～11月27日^日
新潮社記念文学館

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
月曜休館・ただし祝日は開館

観覧料 大人(高校生以上)300円 小中学生150円
※ 団体割引あり

〒014-0311 秋田県仙北市角館町田町上丁23

電話 0187(43)3333(仙北市学習資料館共通)

主催 仙北市教育委員会

郷土の文化人として活躍した^{とみきともじ}富木友治。その友治が角館町(現仙北市)に生を受けたのが今から100年前の大正5(1916)年です。

著作『^{とちのき}橡ノ木の話』は、昭和17年に52回にわたり^{あきたさきがけしんぼう}秋田魁新報へ連載された、20代の代表的な作品です。東北地方の民間説話をもとにした三話で構成され、秋田の版画家・^{かつひらとくし}勝平得之の版画が挿絵として使われています。

^{とちのき}橡ノ木をめぐる三つの物語を、当時の版画とともに一。

生誕100周年記念企画展

とみきともじ とちのき

富木友治 橡ノ木の話展

富木友治は昭和43年に亡くなるまで、郷土の文化人として活躍した人物です。日本画家平福百穂^{ひらふくひやくすい}の甥で、旧制角館中学校を卒業後に日本大学芸術科に入り、帰郷後も中央の文化人と交流を持ちつづけ郷土の文化振興のために尽力しました。その友治が角館に生を受けたのが今から100年前の大正5(1916)年です。

『橡ノ木の話』は昭和17(1942)年2月18日から4月22日まで52回にわたって秋田魁新報^{あきたきけしんぱう}へ連載された作品です。20代の友治が残した代表的な作品で、東北地方の民間説話を基にした3話から成り立つ物語集です。勝平得之^{かつひらとくし}のあたたかな作風の版画が挿絵に使われ、農村の生活を視覚からも伝えています。

友治の生誕100周年記念するこの企画展では、物語に触れて頂く機会となるよう、勝平得之による版画約50点とともに『橡ノ木の話』をご紹介します。

○主な出品資料

『橡ノ木の話』(ことたま書房 S18)(復刻 翠楊社 S56)

『版画集 橡ノ木の話』(勝平得之 S17)ほか



▲勝平得之(右)と友治

『橡ノ木の話』の合作を機に、二人は終生交友を続けた。写真は昭和17年、羽黒山にて。

勝平得之 かつひら・とくし M37-S46

版画家。秋田市に生まれる。本名徳治。家業の紙すきをするかたわら独学で色刷版画を研究。24歳で、自画自刻自刷りの多色版画の技術を完成。郷土の農村風俗を表現した独自の作風を確立した。

○富木友治 略年譜

大正5年 富木庄助・タツの六男として角館町横町に生まれる。母タツは、日本画家平福百穂の妹。

昭和9年 日本大学芸術科入学。翌年、石川達三とともに雑誌「星座」の同人となる。

〃11年 同大中退、陸軍省外郭団体の日本機械化兵器研究所に就職。

〃14年 同研究所を退職し帰郷。このころから民俗学の学究生活に入る。

〃16年 1月7日、「北方文化連盟」結成。代表として地方文化運動に力を注ぐ。

〃17年 秋田魁新報に「橡ノ木の話」を連載。

〃18年 柳田国男夫妻を田沢湖へ案内。柳宗悦の日本民藝館とともに樺細工の技術向上に尽力。

〃20年 『百穂手翰』刊行、柳田国男が序文を寄せている。

〃24年 富木友治作品集『遠野』刊行。

〃26年 財政難により「北方文化連盟」解散。

〃29年 7月、地域新聞「北仙民友」創刊、主筆として活躍。

〃31年 『日本文化風土記第2巻東北篇』に「羽後の民俗」を発表。

〃37年 『秋田県史』「権工芸史」を執筆。文部省学術調査に参加。

〃38年 4月、町立角館図書館長に就任

〃39年 農村モデル町立角館図書館発足、初代館長に就任。

〃43年 秋田県の依頼により「田沢湖讃—タツコ像によせて」を作詞。

5月24日に喘息の発作により心筋梗塞併発、自宅にて急逝。

○主な著作

『橡ノ木の話』(ことたま書房 S18)、書簡集『百穂手翰』(ことたま書房 S20)、作品集『遠野』(草園書房 S24)、『大威徳山』(威山会 S29)、『田沢湖』(瑞木の会 S34)、『裏日本の生活と民具』(自家出版 S38)など。

(参考資料) 富木友治著『柳田国男—遠野物語をめぐる—』(さとう工房 S46)

富木友治著『橡ノ木の話』(復刻 翠楊社 S56)

新潮社記念文学館編『角館の巨人 富木友治 その仕事と生涯』(H18)